編集後記

会員の皆様のご協力により、「挾間史談」第三号を予定通り発刊することが出来ました。本号には挾間町全域に関するもの、北方、赤野、古野、来鉢、高崎の各集落に固有のもののほか、久大線沿線地域に触れたものなど、郷土に深く関係した論考が寄せられ、会員の皆様方が日頃から地道に地元史研究に取り組んでおられることがよくわかると思います。

二宮修二氏の「甲斐家文書から狭間氏の姿を考察」は、郷土・赤野から発見された第一級史料をもとに、中世の郷土と狭間氏の姿を解説された力作です。

山田氏の論考は、北方下角遺跡の発掘結果から「挾間」という地を考察したもので、注目すべき見解が含まれています。

古野を舞台にした小野氏の「やせうま伝説の背景を想う」は、伝説創出の真相に迫るかたわら、江戸期の古野村のくらしぶりを紹介されています。

河野百雄氏の「挾間の里唄について」の現地調査報告は「挾間の民俗」としても貴重な資料であります。

加藤氏の「辻地蔵堂」は地域に今も深く愛されている地蔵堂の由来を、詳しく解説された作品です。また同氏の「来鉢神社沿革（その2）」は戦後の宗教法人化の歩みを克明にトレースされていて、旧来の社格を問わず、全国のいずこの神社にも共通する事項として大変に参考になる論稿です。

牧氏の「大湯線ものがたり」は大分（古国府）から小野屋まで、沿線のかつての田園風景を彷彿とさせる情緒があります。

坂本氏の「挾間町の街道を思う」は、古代の官道が町内を縦断していたとして、通過していった歴史に思いを馳せています。

また郷土史とは若干肌合いが異なりますが、文化人類学的なアプローチから東西の文化交流について二つの論考が寄せられました。二宮哲雄氏の論稿は、印度説や中国説が大勢を占める獅子舞の起源を、トルコに置き日土の文化の共通性を論じたものです。

河野氏の論稿は氏の長年にわたる研究の成果であり、ユダヤと日本の文化的共通性を例証されています。

佐藤満洋氏の論考は、府内藩奥郷の竹ノ中村に伝わる地方文書の解読を通じて、江戸期の農村の実態に迫る貴重な論稿です。

「佐藤萬里伝」は、高崎村庄屋・佐藤弥治衛門が郷土に残した足跡を顕彰し、あわせて幕末期府内藩の農村の実情と藩政改革を紹介したものです。

今後とも挾間町を中心とした郷土の歴史や民俗に関するもの、民間伝承伝説、神社佛閣の縁起・民間信仰、昔話・里唄などなど、会員の皆様の原稿をお待ちしています。（編集子）